
そして朝が来る

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして朝が来る

【著者名】

IZUMI

並盛りライス

【あらすじ】

消えてしまいたい、もう居なくなりたい。そんな事を考えた事はありませんか？生きている事が実感できない少年の物語。

「おはよー」
声が裏返った。もう朝が来ないかもしれないと思つても、星は徐々に消えてしまつ。
体育座りをしていたら、足がもつれて立てなかつた。
昔はよく何もない所で転んだものだけど、今日ほど泣きやうになつたことはなかつたよつて思つ。

「変なヤツ」
「あんたも相当変わつてる」
「冗談。あたしは平凡で普通の女子高生よ」
「だつて、あんたが話す物語には、一人以上の人間が出てこない」
「へえ、ちゃんと聞いてたんだあ。寝てるのかと思つてた」
「あんたは怖くないの?」
「何が?」
「夜が明けたら、消えてしまつんじゃないかつて……僕はいつも思つてる」
「バカね、君はソコでるじゃな」
「本当に?あんたがやう思つてるだけかもしれない。僕なんていうものは無くて、これはあんたが想像していに過ぎないんじゃないの?」
「だつて、あたしは君に触れることができる」　「あんたが、触れたと思つてるだけかもしれない」
「だつてちゃんと、体温も感触も……」
「指先が嘘をついてるのかも?」
「つるさいなあ、君は存在している。それで良いじゃない」
「まあいいや、そういうことにしどいてあげる」
そよ風が、顔を撫でた。春の匂いがした。小鳥の鳴く声が聞こえ

る。ちゃんと、ここに存在しているという実感はない。

「君、小学校で自分だけ浮いてるクチでしょ」「得意満面に言われても嬉しくないよ。まあ間違つてないけど」

「皮肉屋なんだあ

「あんたは、どうなの?」

「ん~普通……かな」

「分かりやすいな」

「ガキの癡に生意氣」

「女の癡に生意氣」

「うるさい、消えちやえ」

女の影が叫んだ。僕は、ここに居た。

朝が訪れた。女の影は消えていた。全ては僕の想像だったのかも
しない。

背中のコンクリートの壁から冷気が伝わってくる。

朝焼けがビルの背後から昇つてくる。

体育座りをしていた膝が、ガクガクした。喉が乾いていて、酷く
痛い。

立ちが上がるとしてみたが、足がもつれて上手くいかない。
周りを見渡すが、もちろん誰も居ない。 おはようと叫んだつも
りだったが、裏返った声がヒューと鳴つて反響しただけだった。

ここには誰もいない。確に僕が存在していると実感した。

そして……今日ほど泣きそうになつた日はなかつたようと思つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3680b/>

そして朝が来る

2011年1月21日02時56分発行